

「パンセ」における「機械」について

望 月 一 雄

(MOCHIZUKI, KAZUO)

有形無形を問わず、およそ人間のつくり出したもので、それが普遍的な価値を保つために、人間の本質の不変を前提条件としないものはあるまい。有史以来、人類の社会は様々な変貌のうちに非常な発展をとげて来た。人間の知恵は、そのとどまるところを知らぬように思われる。しかし、かくも人間社会にとって有意義な多くの発明、発見も、人間の本質に何の変革をももたらしはしなかった。今日、人間が他の動物をはるかに凌駕する存在となり得たそもその始まりが、火の使用、道具の使用、言葉の使用にあることもさることながら、その質において、その量において、他の動物よりも多種多様の欲望を持っていたこと、これが人間文明の発展に多大の役割を果たしていることは、否むことの出来ぬ事実ではないだろうか。人間にとって悲しむべきことは、いわゆる美德とはいいいかねる多くの欲望が、人間文明の進歩に大いに与って力があるということである。人間は理性の動物であると同時に欲望の動物でもある。おのれの欲望をみたすためには、あらゆる手段を用いて恥じるところがない。およそ地球上に、食欲と生殖欲とに関係なく、同類が憎み合い、殺し合う動物が他にあるだろうか。人類が、いわゆる平和に暮すためには、人間はもう少し怠惰、無気力な性質をもって生れつくべきだったのである。要するに、如何に人間の知恵が発達し、それが社会構造や生活条件を変えていっても、それは人間の本質の変化には何の関係もない。

「あらゆる人間のうちには、絶えず二つの願いが同時に存在していて、一つ

「パンセ」における「機械」について（望月）

は神に向い、一つは悪魔に向う。神への所願、あるいは霊性とは、上昇することへの欲求であり、悪魔への祈願、あるいは獣性とは墮落することのよろこびである。」（ボードレール）⁽¹⁾

人間は永遠の存在ではない。はてしない欲望にさいなまれる人間は、それ故、永遠なるものに憧れる。人間はおのれに定められた生命以上に生きながらえることを祈願する。その祈願を満たすこと、これが宗教の果たす最も大きな役割ではないだろうか。

思うに信仰はおとぎばなしに似ている。分別のつかぬ子供にとって、おとぎばなしは、ひとつの世界、その中で生きることの出来る世界である。子供にとって、絨毯は空を飛ぶことも可能である。長ずるに及んで、彼は絨毯が空を飛ぶことはあり得ないと理解するようになる。しかし、現実の絨毯が空を飛ばなくとも、彼の脳のひだのある部分に、空飛ぶ絨毯の記憶が刻み込まれている。幼時から宗教のおとぎばなしの中にひたって育った人達にとって、信仰は理性の将外となるだろう。幼ない時に神の存在を信じた者にとって、神は、彼の理性の多少とはかかわりなく、彼の脳裏にひそかに存在するのである。この意味において、無神論者は、神を信ずる者と全く異質のものではない。神の存在を否定すること、即ち神の存在について論ずることは、すでに神の存在を或る意味で意識していることに他ならない。無神論は宗教が必然的に持たねばならぬ影のごときものではないだろうか。そして、信仰が人間の永遠への祈願を満たすものであり、心の糧というべきものであるなら、信仰を否定し、神を否定することは、かえって神を信ずる者の信仰心を強鞏にするのに役立つことになるだろう。

ブлез・パスカルは、その短い生涯の晩年に、無神論者、自由思想家を信仰への道へと向かわせるための「キリスト教弁証論」を書こうと考え、それに役立てるべく多くの断片的なノートを残して 1662 年この世を去った。およそ書物の草稿という概念からほど遠いその遺稿は、彼の親族、友人たちの努力

により、「パンセ」の標題の下に陽の目を見ることとなった。肉親である彼等にすら容易に判読出来かねるていの草稿を、あますところなく書き写させて後世に残そうとしたペリエ夫妻の、パスカルに対する異常なまでの敬愛の情もさることながら、それらの遺稿が、今日にいたるまで、その大部分を逸散することなく保管されているという事実も驚嘆に価しよう。かくしてパスカルの思想は三世紀を経たわれわれの中に生きることが出来るようになった。そして、人間の本質に突如として変異か起らないかぎり、将来においても多くの人々の中に生きることになるだろう。

(1)

1670年に刊行された、いわゆるポール＝ロワイヤル版の「パンセ」の序文の中で、エチエンヌ・ペリエは、パスカルの遺稿の状態、及びそれらの遺稿をどのように扱ったかについて、次のように述べている。

「パスカル氏が宗教に関して著作する計画を持っていたことを知っていたので、われわれは彼の死後、この問題に関して書き残されたあらゆる文書を集めることに多大の注意をはらった。われわれは、それらの全体が、いくつもの綴りに分けてとじられているのを見出したが、わたしが既に指摘したように、それは、彼が心に思い浮ぶままを小紙片に書きとめた、彼の思考の最初の表現にすぎなかったもので、そこには何の順序もなく、脈絡もなかった。そして、それらはすべて、まことに不完全で、かつぞんざいに書きなぐってあったので、それを判読するのはこの上もなく困難なことであった。

われわれが最初になしたことは、それらがあるがままの状態、それらが見出された時の混乱のままに書き写させることであった。』⁽²⁾

そして、これらパスカルの遺稿の刊行の方法として、

「いちばんはじめに思いついた方法で、たぶん最も容易であったのは、それらを見出された時と同じ状態のままに、ただちに印刷させることであった…

「パンセ」における「機械」について（望月）

…」⁽³⁾

このポール＝ロワイヤル版のパンセの序文には、はじめ、パスカルの遺稿刊行のための編集委員の一人であったフィヨー・ド・ラ・シェーズ (Filleau de la Chaise) の書いた、Discours sur les Pensées de M. Pascal「パスカル氏のパンセ序説」が当てられることになっていた。しかし、パスカルの遺族、ペリエ夫妻には、この序文が気に入らなかった。フィヨー・ド・ラ・シェーズが、その序文を、ペリエ夫妻に相談もせず勝手に書いたことは明らかとなっているが、それはともかく、この序文には、言って欲しいことは何も書かれておらず、言って欲しくないことが多く書かれていると、ペリエ夫妻は主張して、それらを訂正するか、苦しくは新たに書き直すかを望んだ。彼等は、「序文」が「パンセ」の単なる解説にとどまることを望まなかった。「パンセ」はどのようにして書かれたか。そして、それがどのような経過で刊行されることになったか。そして特に、著者パスカルには如何に信心深い晩年を送ったが、等々、すべてをその中に盛り込むことを望んだのである⁽⁴⁾。こうしたペリエ夫妻の意を受けて、同じく「パンセ」の編集に参加していたエチエンヌ・ペリエが書いたのが、ポール＝ロワイヤ版「パンセ」の序文である。それゆえ、この序文は、彼の両親ペリエ夫妻の意見と、編集委員会の意見とを、ともに反映したものであると言える。

パスカルの遺稿を刊行する方法として、「草稿が見出された時のままの状態」で刊行することに最後まで固執したのはペリエ夫人であった。若しこの方法で、つまりパスカルの草稿に手を加え、取捨選択をし、適当な秩序を与えるという作為を排した方法の下に「パンセ」を出版することを、時代の状況が許し、そして編集委員会がそのような方法で敢えて出版する英断と勇気を持ち合せていたなら、後世の「パンセ」研究の歴史は大幅に書きかえられていたに違いなかった。

エチエンヌ・ペリエがその序文の中で、パスカルの遺稿は、それが見出され

たままの状態で書き写された、と証言しているにも拘らず、その手写本はいつとは知れず消失して、もはや存在しないものと一般に信じられて来た。既に1842年、ヴィクトル・クザンによって、パスカルの草稿原本の存在が明らかにされ、「パンセ」の新版の必要性が指摘されて以来、多くのパスカル研究家により、「パンセ」の新たな版が加えられて来たが、それらの殆んどは、先にあげたフィヨール・ド・ラ・シェーズやエチエンヌ・ペリエの序文に述べられているパスカルのプラン（パスカルは1685年⁽⁵⁾にポール＝ロワイヤルに於いて「キリスト教弁証論」に関する講演を行ったといわれる）、及び、パスカルの残した断章の中に示されているいくつかのプランを手がかりとし、これに多少の主観をまじえながら、各断章を排列したものであった⁽⁶⁾。また、プランシュヴィック版のように、従来の排列、パスカルのプランに関する記録には拘泥せず、編者の主観によって断章を排列したものもあった。そして近年になって漸く、一般に「第一写本」（La Première Copie）と呼ばれている BN. fonds français No. 9203「パリ国立図書館蔵書、フランス部、手書本 9203 番」が、エチエンヌ・ペリエがその序文で述べている写本そのものであることが、ザカリ・トゥルヌールや、特にルイ・ラフュマの綿密な考証により明らかにされるようになった⁽⁷⁾。

「第一写本」は、これを写し書いた人が、正確かつ忠実にその職務を全うしたとするなら、パスカルの遺稿の状態を正しく後世に伝える唯一のものである。特にその1～188頁迄は27の標題の下に分類されており、この分類はパスカル自身の手によってなされたと見做されるので、これによってパスカルの意図していた「キリスト教弁証論」のプランの一端をうかがい知ることが可能となり、今後の「パンセ」研究に大きな光明をもたらすことになった。

以前から「第一写本」は、現存するパスカルの手写本中、最も重要な地位を占めて来たことはたしかであった。しかし、一般に、それはポール＝ロワイヤルにおいて最初の「パンセ」を編集したときに作成されたもの、「パンセ」の初

「パンセ」における「機械」について（望月）

版のひとつの記録だと考えられて来た。しかし、ラフェュマの指摘するように⁽⁸⁾、ポール＝ロワイヤル版は、その中に含む 391 の断章中 203 を、「第一写本」の中では、いわゆる未分類となっている断章から取っている点、また、標題の付してある 27 章のうちに、2～3 の断章しか含まないものがある点などから、これが近い将来に出版する目的で編集委員会により作成されたもの、もしくは、その意図のもとに作成しはじめたが途中で中止したものではないことは明らかである。「第一写本」における分類が、パスカル自身の手によるものでないことを立証するのは、その決め手となるものが何もなく、したがって不可能に近いといわねばなるまい。

問題は、この分類をパスカル自身が行なったとした場合、いつ頃パスカルは分類に着手したか、また、何故彼はその分類を途中で止めてしまったか、ということである。「キリスト教弁証論」の著作をめぐるパスカルの晩年は謎に一つまれているといってよい。ペリエ夫人による「パスカルの生涯」、その他、同時代のいくつかの証言により、パスカルが「キリスト教弁証論」に類するものを書こうとして、そのためのノートをとっていたことは明らかとなっている。しかし、たとえばパスカルはそれらのノートを主としていつ頃行なったか、という点に関して、ペリエ夫人の「パスカルの生涯」と、その息子エチエンヌ・ペリエの「パンセ序文」では全く対立する。

ペリエ夫人によれば、パスカルがこの企てに専念しはじめたのは、34 才頃で、この問題に関して、思いうかぶ様々な考えを集録することに、他の仕事がゆるす範囲でまる一年を費した。そして一年の後、すなわち満 35 才のとき、パスカルの病気は再発し、それ以降は生きたとは名ばかりで、この類のことは全く何も出来なかったという⁽⁹⁾。これに対し、エチエンヌ・ペリエは、パスカルは、ポール＝ロワイヤルでの講演ののち、その晩年の四年間を病氣と衰弱とたたかいながら、（しかし常に病床に伏していなければならぬという状態ではなかった）かねて考えていた著作に関して、現存あるすべての部分を書いた、

と述べている。

この二人がともにパスカルの執筆の時期に関して思い違いをしているとは考えられない。両者のいずれかが誤っているか。双方とも一部分正しいか、このどちらかであろう。

ラフュマによると、パスカルは、はじめ大版の紙に将来の著作のノートを取り、その内容に応じて、ペンで線を引いてこれを区別した。また各頁の冒頭に小さな十字をのしつけた。そして 1658 年の後半、しかもポール＝ロワイヤルでの講演よりも以前に、書きためてあったそれらの紙を切り離し、分類に着手した。その後、1658 年末、もしくは 1659 年のはじめ、病状の悪化から分類の仕事を中止し、以後決して分類の作業は行なわなかったという⁽¹⁰⁾。また、分類をはじめた動機としては、その中に A. P. R. という章があることから察せられるように、ポール＝ロワイヤルでの講演に役立てようとしたのだと考えている⁽¹¹⁾。これはたしかに妥当な解釈である。パスカルがこの分類をポール＝ロワイヤルでの講演のために行ったと考えるなら、少なくとも、フィヨー・ド・ラ・シェーズやエチエンヌ・ペリエの述べているプランは、パスカルの講演に出席した人から彼等が実際に得たものであり⁽¹²⁾、同時にそれが「第一写本」におけるパスカルのプランと一致することの説明ともなる。しかし、ポール＝ロワイヤル版の「パンセ」が、このパスカルのプランを採らなかった理由については、パスカルの残した断章は、彼が講演に際して示した見事な秩序を再現するには余りにも脈絡のつかぬものが多いので、それに固執しなかったという、エチエンヌ・ペリエの序文で納得出来るにしても、何故、エチエンヌ・ペリエは、「第一写本」に見られる 27 章の分類について簡単に言及することをしなかったのだろうか。

再びパスカル自身が断章を分類した時期の問題にもどろう。ペリエ夫人の記述が正しいとするなら。パスカルは当然、ポール＝ロワイヤルでの講演に、それまで書きためたものの多くを役立てるべく、そのために一時的な分類を行な

「パンセ」における「機械」について（望月）

ったと考えられる。一時的な分類である以上、それ以後再び分類の仕事には手をつけなかったことも理解出来る。しかし、パスカルが 1658 年以前に、その断章の殆んどを書いてしまったとするなら、あれほどの叡智を備えた人物が、いかに病気のためとはいえ、その後の四年間にごくわずかのものしかつけ加えなかったのは不可解という他はない。また、エチエンヌ・ペリエの記述の方がより正確であるとするなら、パスカルは死の前の四年間の或る時期に、それまで書きためたものを分類しはじめ、途中で止めてしまったと考えられる。しかし、当然ポール＝ロワイヤルでの講演の後に分類が行われたのであろうから、これでは、27 章の中に何故わざわざ A. P. R. 「ポール＝ロワイヤルにおいて」の章をもうけたのかの説明がつかない。

しかし、パスカルがこれら多くの断章を書いた時期、そしてそれらの断章を分類した時期の問題は、パスカルの伝記的意味では重要ではあるが、パスカルの思想の観点からは余り重要なことではない。パスカルの「パンセ」は、パスカルの脳裏をかけめぐった思考の、あるいはパスカルの知識の、断片にすぎない。パスカルの遺稿の大部分は、「キリスト教弁証論」を書くという意図の下に集められたあらゆる種類の素材である。「キリスト教弁証論」を荘麗な大伽藍にたとえるなら、パスカルの残したものは、それを建造するための石材である。パスカルは、そのために大いそぎで石を切り出し、一つところに集めて来た。その中には多少のみがきをかけたものもあれば、これから削り、みがきをかけるべきものもあった。これらの素材の形をととのえ、更に多くのものを加えながら、彼の考える大建造物を完成するには、尚多くの年月を必要とした。そして或るとき、彼は既に集めた材料を、その用途別に集めて見た。そして彼は間もなく世を去った。

パスカルの残したものが、「キリスト教弁証論」に類する著作に役立てようとして、彼が自分自身のために書いた覚え書きにすぎないということ、これは、われわれが常に留意しなければならぬことである。われわれはパスカルの

残したものを、出来るだけパスカルの意図に近いものを構成しようと努力しながら、さまざまな形に組立てることが出来る。しかし、そうして構成したものが、パスカル自身の意図したものにどの程度近いものであるか、誰にも判断することは出来まい。パスカルの残した断章を用いて、パスカルの「キリスト教弁証論」を再現しようとするとき、パスカルの材料を自己流にきざみ直し、ある空所を埋めるに別のもの、パスカルが他の箇所に用いようと考えていたものをもってしていないと断言できる者がいるだろうか。

しかし、パスカルの残したものが、いわゆる秩序のある書物を構成し得る草稿の概念からほど遠いものであってみれば、その中から、後世の人たちが、各自おのれの意に叶ったものだけを取り上げるのは当然であり、これがパスカルの「パンセ」の宿命であるといえよう。それゆえ、パスカルの「パンセ」を、パスカルが生前に意図していた通りの秩序に置く試みは、パスカル自身が、そのプランを誰の目にも明らかとなるような形で残しておかなかった以上「第一写本」がパスカルの死の直前における彼の草稿の状態であることが、決定的に解明されることによって終りをつげるといふべきであろう。

そして、ここで試みようとしていることも、御多分にもれず、パスカルの「パンセ」から二三の素材を抜きだして、ひとつの解釈を示そうとすることなのである。

(2)

「第一写本」における、前半の 27 章に亘る分類が、パスカル自身の手になったと考えるとき、パスカルがこの分類を行なった動機の如何を問わず、それからパスカル自身の「キリスト教弁証論」のプランの一端をうかがい得るといふことは論を俟たない。たしかに Order「秩序」の章から始まって Conclusion「結論」の章で終るこの 27 の標題の排列には一関性がみとめられる。この「第一写本」における第一章「秩序」の項目は 12 の断章を含んでいる

「パンセ」における「機械」について（望月）

が、その中に la machine「機械」という語彙のあらわれる断章が三つある。
先づ 5 番目の断章、次いで 7 番目、そして 11 番目の断章がそれである。

Ordre

Une lettre d'exhortation à un ami pour le porter à chercher. Et il répondra : mais à quoi me servira de chercher, rien ne paraît. Et lui répondre : ne désespérez pas. Et il répondrait qu'il serait heureux de trouver quelque lumière. Mais que selon cette religion même quand il croirait ainsi cela ne lui servirait de rien. Et qu'ainsi il aime autant ne point chercher. Et à cela lui répondre : La Machine. (5-247)⁽¹³⁾

(秩序)

或る友人を求めるように仕向けるための勧告の手紙。すると、彼は答えるだろう。「求めたとして、それがわたしに何の役に立とう、何も示されはしない。」そこで彼に答える。「絶望してはならない。」すると彼は「何か光が見出せたなら幸いだが、この宗教そのものによれば、たとえそういうふうに信じたとしても、それが何の役にも立たぬというのであれば、いっそ、わたしは何も求めないことにしたい。」と答えるだろう。そこで、それに対して彼に答える。「機械」。

Lettre qui marque l'utilité des preuves. Par la Machine.

La foi est différente de la preuve. L'une est humaine et l'autre est un don de Dieu. *Jestus ex fide vivit*. C'est de cette foi que Dieu lui-même met dans le cœur, dont la preuve est souvent l'instrument, *fides ex auditu*, mais cette foi est dans le cœur et fait dire non *scio* mais *Credo* (7-248)

（証拠の効用を示す手紙。機械によって。信仰は証拠とは異なる。一方は人間的であり他方は神の賜物である。「義人は神によりて生くべし」神御みづからが心情のうちに置き給うのは、この信仰についてであって、証拠はしばしばその手段となる。「信仰は聞くによる」しかし、この信仰は心情のうちにあり、「わたしは知る」と言わず「わたしは信ずる」と言わせる。）

Ordre. Après la lettre qu'on doit chercher Dieu, faire la lettre d'ôter les obstacles qui est le discours de la machine, de préparer la machine,

de chercher par raison (11-246)

（秩序。神を求めるべきであるという手紙の後に、 障碍を除くことという手紙を書くこと、これは機械についての論述であり、 機械を準備すること、 理性によって求めることについての手紙である。）

これら三つの断章からも、パスカルがその「キリスト教弁証論」を手紙の形式で書こうとした、少くともそう考えた時期があったことは明らかである。又、同じ章の他のいくつかの断章は⁽¹⁴⁾、パスカルが対話の形でこれを書こうと考えたこともあったことを示している。このことは「田舎人への手紙」で当時の喝采を博したパスカルにして見れば当然の発想であった、といわねばなるまい。それはともかく、これらの断章にあらわれる *la machine* 「機械」とは何であろうか。「たとい神を求めても、そういうふうな信じかたでは結局何の役にもたたぬというのなら、むしろ神を求めない方がましだ」と考える友人（＝無神論者）に対して、また、その友人が神を求める際の妨げをとり除くために、或るいは証拠の効用を示すとき。これらすべての場合に用いられている「機械」という言葉は、上記三つの断章を理解する鍵である。また、パスカルの「キリスト教弁証論」のプランが、それを二部に分けようと意図していたことを示すいくつかの断章、及びフィー・ド・ラ・シェーズやエチエンヌ・ペリエによって示されたプランにより、それが、 1) 神を信じない者に信仰を受け容れさせる。 2) キリスト教が真理であることを証明する。の二つの部分に分けられると考えるならば、これらの三つの断章はその第一部、「神を信じない者に信仰を受け容れさせる」に属するプランを示していることは明らかである。ここにおいて、「機械」は、パスカルの信仰の論理を解き明かす鍵ともなり得るだろう。

「機械」という語彙は、その本来の意味、及びその多くの派生的な意味の他に、パスカルの時代には、新たな意味（それに類した表現は以前にもあるが）が加えられるようになった。それはデカルトの有名な *la doctrine des bêtes*

「パンセ」における「機械」について（望月）

automates ou animaux-machines 「動物自動機械又は動物＝機械説」によるものである。デカルトは、理性を持たぬ動物はすべて、人間の手によって作られた自動機械（例えば時計）に比すべきもので、それら動物のあらゆる動作は、自動機械におけると同様な自然的運動によっている。人間の身体もまた、これに類する自動機械である。しかし人間にあっては、身体は物質的なものとは全く異質の、理性的靈魂と結びついており。この理性的靈魂と身体（自動機械）との結合が真の人間を構成するものであると考えた⁽¹⁵⁾。デカルトは「人間論」においても、人体構造に *cette Machine* 「この機械」⁽¹⁶⁾ という表現を用いているが、このような身体＝機械の意味は、デカルト好きの人たちによって好んで用いられるところとなった⁽¹⁷⁾。

しかし、パスカルはデカルトを好まなかった。

「わたしはデカルトを許すことが出来ない。彼はその全哲学のなかで、出来得れば神なしに済ませたいと思った。だが、彼は世界を動かすために、神に最初のひと弾きをさせないわけにはいかなかった。それが済めば、もはや彼は神を必要としない。」(1001-77)

マルグリット・ペリエにより、パスカル自身の言葉として伝えられるこの断章が、彼のデカルト観を如実に物語っている。パスカルにとってデカルトは、大気圧の存在に関する実験をめぐる起きた対立関係もさることながら、神の問題、信仰の問題に関して、相容れることは全く出来ない存在であった。それゆえ、パスカルのいう「機械」は、デカルトのそれとは全く別のものを意味すると考えてみる必要がある。

しかし、この「無用にして不確実なデカルト」(887-78)に、パスカルの「機械」が多くを負っていることは、殆んどパスカル研究家のひとしく認めるところである。ブランシュヴィックによれば、パスカルの「機械」というのは、理性の権威をのがれて、それ自身の固有の法則によって働く部分、人工的に作られた自動機械に類するものとして考えられた人間の身体を意味する。すなわ

ち、人間のうちにあるもので、思考（理性）から生じないものはすべて、身体をその根源とするメカニズム（もしくは自動作用）にしたがうものであり、それが想像力と情念とによって靈魂につたえられる。身体に由来する障得を除くためには、それゆえ身体をおのれに服従させねばならない。人間のうちに、正しい意志のとる方向に従うような人為的な性質をつくり出さねばならない。このようにして、人間の勝手気ままな気紛れに委ねられている習慣も、ひとたび正しく律せられるならば、信仰の手段となり得るだろう⁽¹⁷⁾。

また、ジャン・ラポルトのように、「機械」はパスカルが他の断章（821-252）でいう Automate「自動機械」と同義であることは認めるが、それをブランシュヴィックのように身体の自動作用の意味に重点を置く解釈をとらないものもある。ラポルトによれば、パスカルの「機械」もしくは「自動機械」とは、靈魂の習慣的な傾向である。より厳密に言うならば、習慣の作用（反復作用）によって、ある習慣的な傾向、ある性癖を靈魂に結びつける能力のことである。つまりパスカルは、人間の靈魂の中には、いわゆる精神若しくは理性とは別の、無意識のうちに作用するものがある、それは身体において見られる自動作用に比せられるべきもの、いわば心理的自動作用であり、これに「機械」という言葉を用いた、と考えている⁽¹⁸⁾。

これらの大勢を占める意見に対して、la machine「機械」は la machine arithmétique「計算器」に関係ありとするのがデューの意見である。それによれば、多くの人々がパスカルの「機械」を「自動機械」を意味するデカルト的な表現だと考えているのは誤りであって、これは、「護教論者パスカル」が「機械設計者パスカル」から借りて来た表現であるという。恩寵のたすけにより、人間が信仰にみちびかれる、秩序正しく、かつ複雑きわまる作用、それは、パスカル自身の発明した計算器の、複雑だが秩序正しい動きに比すべきものである。それゆえ、信仰における「計算器」、これが「パンセ」における「機械」の持つ意味であるという⁽²⁰⁾。

「パンセ」における「機械」について（望月）

これは、たしかに面白い意見である。しかし、機械＝計算器の語彙的なつながりの他に、そこに論理的な結びつけを見出すことは、多少飛躍しすぎの印象をまぬがれることは出来ない。

「機械」という語彙の面白い用法としては、その当時、多くの人が、或ることがらを表現する適当な言葉が見つからない時には *Il faut faire des machines pour cela; Ce sont là des machines* などという具合に *machines* で代用したという⁽²¹⁾。パスカルの *Machine* もこれに類するもの、気に入った用語もしくは表現が見出せぬままに「機械」で代用したのではないかと考えることも可能であろう。

それはともかく、パスカル自身が、「機械」の意味するものをはっきりと示していない以上、われわれはパスカルにおける「機械」の意味を、彼の残した他の断章のうちに求めなければなるまい。

(3)

先づ「パンセ」の他の断章で *la machine* 「機械」という語彙のあらわれているものを見よう。

「国王には、近衛兵、鼓手、将官、その他機械を尊敬と畏怖の方へ傾けさせるあらゆるものが随伴しているのがつねである。そのため、時折、国王が供も連れずにたったひとりにいるときにも、その顔は臣下に尊敬と畏怖の念を起させる。というのは、われわれは国王その人と、いつも彼と共にある従者たちとを切り離して考えることが出来ないからである。この結果が、そのような習慣から生じることを知らない世間の人は、それが国王の本来の力から生じるものと思ひ込む。……」(25-308)

この断章における *la machine* 「機械」は、*le corps* 「身体」と解することが出来るが、同じく「人の心、もしくは感情」と解しても差支えないだろう。人の心にそのような尊敬、畏怖の念を起させるのは習慣 *la coutume* の力に

よるものであって、それ以外の何ものでもない。この断章からは、「機械」に働きかけるのは「習慣」であること、つまり「機械」は習慣によって動くという事を知ることが出来る。

「デカルト。

大まかにこういうべきである。『それは形状と運動から成っている。』なぜなら、そのことは真実だから。ところが、どんな形状、どんな運動であるかをいい、機械を構成して見せるのは滑稽である。なぜなら、そういうことは無用で不確実で困難なことだからである。そして、たとえそれが真実であるとしても、われわれはあらゆる哲学が、一時間の労苦に価するとは思わない。』（84-79）

この断章はパスカルが一度書いてから、それを線を引いて消している。ここにおける「機械」は、その本来の意味から派生した。「仕組み、からくり」の意味に解すことが出来よう。したがってこの断章は、パスカルのデカルト哲学に対する考え方を知る意味では重要であっても、「秩序」の章の断章中にあらわれた「機械」の解釈という点では何の役にも立たない。

以上が「パンセ」の中で Machine「機械」という語彙含むもののすべてである。これらの断章（最初の三つをも含めた）から、「機械」とは、それが信仰に関して重要な役割を占めるもので、かつ、習慣がそれに及ぼす力は大であるということが理解できよう。

さて、このように信仰に関して重要な地位を占める「機械」の意味は、次の断章によって可成り明らかなものとなる。

Car il ne faut pas se méconnaître, nous sommes automate autant qu'esprit. Et de là vient que l'instrument par lequel la persuasion se fait n'est pas la seule démonstration. Combien y a-t-il peu de choses démontrées! Les preuves ne convainquent que l'esprit, la coutume fait nos preuves les plus fortes et les plus crues. Elle incline l'auomate

qui entraîne l'esprit sans qu'il y pense. Qui a démontré qu'il sera demain jour et que nous mourrons et qu'y a-t-il de plus cru? C'est donc la coutume qui nous en persuade. C'est elle qui fait tant de chrétiens, c'est elle qui fait les Turcs, les païens, les métiers, les soldats, etc. (...) Enfin il faut avoir recours à elle quand une fois l'esprit a vu où est la vérité afin de nous abreuver et nous teindre de cette créance qui nous échappe à toute heure; car d'en avoir toujours les preuves présentes c'est trop d'affaire. Il faut acquérir une créance plus facile qui est celle de l'habitude qui sans violence, sans art, sans argument nous fait croire les choses et incline toutes nos puissances à cette croyance, en sorte que notre âme y tombe naturellement. Quand on ne croit que par la force de la conviction et que l'automate est incliné à croire le contraire, ce n'est pas assez. Il faut donc faire croire nos deux pièces, l'esprit par les raisons qu'il suffit d'avoir vues une fois en sa vie et l'automate par la coutume, et en ne lui permettant pas de s'incliner au contraire. *Inclina cor meum deus.*

La raison agit avec lenteur et avec tant de vues sur tant de principes, lesquels il faut qu'ils soient toujours présents, qu'à toute heure elle s'assoupit ou s'égare manque d'avoir tous ses principes présents. Le sentiment n'agit pas ainsi; il agit en un instant et toujours est prêt à agir. Il faut donc mettre notre foi dans le sentiment, autrement elle sera toujours vacillante. (821-252)

（何故なら、われわれは自己を見誤ってはならない。われわれは精神であると同様に自動機械でもある。したがって納得する手段は単に証明だけではない。証明されることのいかに少ないことか！証拠は精神を説得するだけである。習慣がわれわれにとって、証拠を最も強力な、最も信頼し得るものとする。習慣は、おのれ自身気づかずに精神をひきずっている自動機械を〔ある方向へ〕傾ける。明日は来るだろう、われわれは死ぬ

だろう、などということを誰が証明しただろうか？ またこれ以上に信じられていることがあるだろうか？ それゆえ、われわれにそれを納得させるのは習慣である。かくも多くのキリスト教徒をつくったのも習慣である。トルコ人、異教徒、職人、兵士、等々をつくったのも習慣である。……要するに精神がひとたび真理の在り場所を知ったならば、たえずわれわれから逃れようとするこの信仰にわれわれを浸らせ、われわれをそれに染らせるためには、習慣のたすけをかりねばならない。なぜなら、真理の証拠をつねに眼前に保つのは、わずらわしいことだからである。一そう容易な信仰をものにしなければならない、それは、無理をせず、技巧を用いず、議論もせずに、われわれにことがらを信じさせ、われわれのあらゆる能力をこの信仰に傾かせ、かくしてわれわれの魂を自然にそこへとおちこませる。人が信念の力だけで信じているとき、自動機械がその反対のことを信じる方へ傾くというのでは十分だとはいえない。それゆえ、われわれの二つの部分信じさせなければならない。精神を、その生涯に一度見たら十分な理由をもって信じさせ、自動機械を習慣によって、かつ、反対の方へ傾くことを許さないようにして信じさせなければならない。『神よ、わが心を傾かせ給え。』

理性はゆっくりと、多くの原理にそれぞれ眼を注ぎながら働らく。しかもそれらの原理は常に目の前になければならない、というのは、それらの原理が現存していないと、理性は絶えず眠ったり、迷ったりするからである。感情はそうには働らない。それは一瞬に動き、つねに動き出そうと身構えている。それゆえ、われわれの信仰を感情のうちに置かなければならぬ。さもないと信仰はつねにぐらついたものになるだろう。)

この断章は『神よ、わが心を傾けさせ給え』までと、それ以下との二つの部分に分けられ、それが一見異なった主題を扱っているような印象を与えるが、実際には、この両者には非常に密接な関係がある。まず前節をもう少し簡単に言いかえるなら次の通りになるだろう。

人間は、精神であると同時に自動機械でもある。この自動機械とは、証拠によって真理を納得する精神と対比されるべきもので、しかもこれは無意識裡に精神をおのれのとる方向へと従わせている。人間は、この自動機械を習慣によって真理＝信仰へと傾けなければならない。又、精神は証拠によって真理を把握する。しかし、精神がみつから証明し得る真理は殆んどないので、それを習慣（経験）から得なければならない。そして、ひとたび真理を知っても、それを保ちつづけるには習慣のたすけをかりねばならない。習慣は自動機械を信仰へと傾かせ、同時に、精神に十分な証拠を与える。

「パンセ」における「機械」について（望月）

ここにおいて、次の文節で「理性」と呼ばれているものが、上記の「精神」と殆んど同義であることが明らかである。

「理性は多くの原理に眼をそそぎ、それにもとずいて働く」。しかし、この多くの原理を理性自身がおのれの推理によって原理であると判断するのではない。理性は事物を証明により把握する能力しか持たない。したがって理性は習慣によって原理を納得すると同時に、その原理を原理であると認める力を、おのれとは異なるもの手に委ねなければならない。では理性は全く無力なのだろうか。そうではない。理性は人間にとって真理に認識し得るひとつの手段である。しかし理性が真理を認識するためには、理性がそれを真理であると証明するための根底となるもの、つまり第一原理の認識を他に求めなければならないのである。また習慣が理性に真理を納得させるにしても、それが真理であることを直観的に認識する何ものかがあって、それが理性に働きかけているのではない限り、理性は真理を、第一原理を納得するに至らないだろう。パスカルは、このように真理を直観的に認識するものが *le cœur* 「心情」であるという。

Nous connaissons la vérité non seulement par la raison mais encore par le cœur. C'est de cette dernière sorte que nous connaissons les premiers principes et c'est en vain que le raisonnement, qui n'y a point de part essaie de les combattre... (110-282)

（われわれは真理を理性によってのみならず、心情によっても知る。この後者によってわれわれは第一原理を知る。それに与らない推理が、この第一原理をくつがえそうとしてもむだである……。）

人間は心情によって第一原理（たとえば空間、時間、運動、数の存在など）を認識するのである。

...c'est sur ces connaissances du cœur et de l'instinct qu'il faut que la raison s'appuie et qu'elle y fonde tout son discours. (Id)

（この心情の認識、本能の認識の上にこそ理性はたより、そこにそのあらゆる論証の

基礎を置くべきである。）

このように人間は真理を理性及び心情によって知ることが出来るが、理性はそれの基礎となる第一原理を心情に頼っている以上、その力の及ぶ範囲が限られてしまうのは当然である。それ故、理性はおのれの力の限界をさと、おのれの力を超えるものが無限にあることを認めるべきである。理性は、自己の無力を悟ることによって、はじめてその本来の力を発揮することが可能となる。しかし、人間が真理に至る二つのもののうち、理性がかくも無力なものであって見れば。

...plût à Dieu que nous n'en eussions au contraire jamais besoins et que nous connussions toutes choses par instinct et par sentiment, mais la nature nous a refusé ce bien; elle ne nous a au contraire donné que très peu de connaissances de cette sorte; toutes les autres ne peuvent être acquis que par raisonnement.

Et c'est pourquoi ceux à qui Dieu a donné la religion par sentiment de cœur sont bienheureux et bien légitimement persuadés, mais ceux qui ne l'ont pas nous ne pouvons la donner que par raisonnement, en attendant que Dieu la leur donne par sentiment de cœur, sans quoi la foi n'est qu'humaine et inutile pour le salut. (Id)

(むしろ願わしいのは、反対にわれわれが理性を全く必要とせず、すべてのことを本能により、感情 (=直観) によって知り得ることである。しかし自然はわれわれに対し、このような幸福を拒んだ。自然はその反対に、われわれにこの種の認識をごくわずかしか与えてくれなかった。その他のすべての事は、推理によってしか得られないのである。

そういうわけで、神が心情の直観を通して宗教を与えた人々は、まったく幸福であり、まったく正しく納得させられた者である。しかし、宗教をもたない人々には、神が心情の直観を通して彼等に宗教を与えたまうまで、推理によって与えてやるほかはない、この心情の直観なくしては、信仰は人間的なものにすぎず、救いのためには無益なものとなる。)

ここで注目に価するのは、パスカルが、この断章 (110-282) の中で、真理を認識し得るものとして、le cœur 「心情」 ces connaissances du cœur et de

「パンセ」における「機械」について（望月）

l'instinct 「この心情と本能による認識」 par instinct et par sentiment 「本能により、直観によって」 par sentiment de cœur 「心情の直観によって」と、四つの異なった表現を用いていることである。これら cœur 「心情」 instinct 「本能」 sentiment 「直観」は、ともに「理性もしくは推理」と対立的な意味で用いられており、また、その認識するものが、真理であるから、instinct 「本能」及び sentiment 「直観」は多少のニュアンスの相違こそあれ、cœur 「心情」の同義語、もしくは心情の作用を示すものと解すことが出来る。「パスカルの語彙の用いぶりは大貴族のごとくである。彼は少しく気かけぬふりをしているが、語彙の持つあらゆる秘密に通じている。彼は用いるべき言葉を全く自由に選び、おまけに、同じように意のままに、それらの言葉に独自の独創的な意味を与える。『心情』という言葉の知性化がその典型的な例である」。(22) と、ジュンゴはいっている。もっとも、「心情」をこのような意味に用いたのはパスカルが初めてではないと、ジュンゴはいくつかの例をひいた後、パスカルはそれらの意味を可能なかぎりにおし進めたのだと述べている。

この、パスカルが「心情」という言葉に与えたはたらきに関して、ジャック・シュヴァリエは次のように述べている。

「パスカルにとって『心情』とは何であろうか、まず最初に、パスカルは世の常の哲学者と異なり、自家用の術語をつくらなかったことに留意しよう。そのため、彼の言葉が外見上の正確さと厳密さを欠くことになったとしても、その柔軟さと生氣とにおいてとりわけすぐれたものとなった。(……) パスカルにあっては、思想はそれを表現する言葉の奴隷とも囚人ともならず、つねにその言葉を支配している。パスカルは、ごくありふれた言葉を用い、それを見事に自分のものとしている。そして、すべての用語は彼の作品の中で、あまたの世紀がそれに与えたさまざまな変化に富んだ意味と、余りにも厳格な概念的思想によって破られた、それらの間のつながりを示す微妙なニュアンスをとり戻した。

ところで、パスカルが心情という言葉を用いているのは、まさしくこのような仕方によってである。パスカルにおいては、日常用語におけると同じく、聖書に用いられている場合と同じく、心情はわれわれの存在の最も内的な部分を指している。それは感情と道徳的生活をつかさどる器官であるばかりでなく、認識をつかさどる器官のひとつでもあり、われわれの知的ないとなみの本源である。それは、感情と理性の最尖端というべきものであろう。」⁽²³⁾

ともかくわれわれは、パスカルにおいて「心情」は真理を本能的かつ直観的に認識する能力である、ということが出来よう。ここにおいて、パスカルが断章 (821-252) において、「感情 (le sentiment) はそのようには働かない。それは一瞬に動き、つねに動き出そうと身構えている。」という。この le sentiment は、断章 (110-282) において le sentiment de cœur と表現しているものに他ならないと言うことが出来る。しかしパスカルによれば、人間の「心情」は真理を直観的に認識する能力を完全に備えているわけではない。人間の理性が、それ自身で真理を認識する力がなく、それを「心情」に委ねなければならないとするなら。「心情」もまた真理を認識する能力をその内に秘めているが、それが働き出すためのものを他に求めなければならないのである。

人間の理性が、真理をおのれ自身で認識し得ないのは、ひとつには、人間の存在が時間的にも空間的にも有限の存在であることに起因し、もうひとつには、人間が肉体と靈魂という、本質的に異質のものの結合であることに起因するとパスカルは考える。

人間は無に比すれば無限に大きい、無限に比すれば無に等しい存在である。人間は無でもなく、全てでもない中間の存在である。それゆえ人間は、それなくしては自然界の事物に対する真の認識などあり得ない、無および無限の本質を、推理によって理解することは出来ない。「われわれの知性が思推的な事物の秩序の中で占めている位置は、われわれの身体が自然界のひろがりにおいて占めている位置に等しい」(199-72)

「パンセ」における「機械」について（望月）

しかも、この推理する能力は、人間の肉体的な部分ではなく、精確の働らきに帰すべきもの、いわゆる靈魂の部分である。人間は、おのれの精神的なものを、肉体という物質的な部分から切り離すことが出来ないために、今度は、物質的なものの秩序とは全く異質のもの、精神的なものを理性によって推理し、認識することが不可能となる。

しかし、人間は、無および無限の存在すること、またそれに類する超自然的なものの存在することを知っている。これは、理性の力では如何ともしがたいこれらの事柄の認識を、人間はおのれの靈魂の持つもうひとつの能力、精神的なはたらき（理性）とは別のものによって行っているからである。これが先にも述べた「心情」による認識である。心情は、パスカルにとっては、人間の靈魂のうちにあって、事物的なものであれ、事物の秩序とは全く異なる超自然的なものであれ、理性による認識の力を超えたものを、そのあるがままに感じとり、認識する能力である。

ところで、もう一度繰返すが、理性の力を超えたものを直観的かつ本能的に認識する「心情」のはたらきは、それ自身、完全無欠なものではない。もしこの能力が完全なものであったなら、人間は生れながらにして、すべての真理を認識し得ることになる。しかし、「人間は生れながらにして誤謬に満ちた」存在である。これは人間の本性に由来することパスカルは考えた。

「われわれは真理を願っている、それなのに、われわれのうちに不確定しか見出さない。

われわれは幸福を求めている、だが、悲惨と死しか見出さない。

われわれは真理と幸福を願わずにはいられない。が、真理も幸福も得ることは出来ない。

この欲求がわれわれに残されているのは、われわれを罰するためでもあり、また、われわれが、どこから落ちて来たかを、われわれに気づかせるためでもある。」(401-437)

人間のうちに真理をこいねがう欲求が潜在していること。これが、「心情」が直理を認識するための重要な要素である。このような真理と幸福へのひそかな欲求、これは、人間がかつて有していた本性の名残りによるものである。人間は原罪によって、かつて享受していた真理と幸福を今や失ってしまった。かつては十全のものであった本性は、今や墮落し、人間は、はじめ、そうであった幸福な状態から墜ちて、悲惨の中にうごめいているのである。

「なぜなら、もし人間がはじめから墮落していなかったとすれば、彼は無罪の状態で、真理と幸福とを確実に享受していることだろう。そして、もし人間が、はじめから墮落以外の何ものでもなかったとすれば、彼は真理と幸福とについて、いかなる観念も持たないだろう。しかし不幸なことには、(……) われわれは幸福の観念を持っていながら、それに到達することが出来ないのである。われわれは真理の影を感じながら虚偽しか持っていない。絶対に無知であることも確実に知ることも出来ない。してみると、われわれが、かつては完全な段階にいたのに、不幸にもそこから墮落したのだということは余りにも明白である。」(131-434)

人間が墮落によって、真理と幸福を享受していたかつての本性を失ったとき、人間にとって、すべてのものがその本性となり得るようになってしまった。人間のうちに潜在する悲惨の意識は、人間をさいなみ、人間は必然的にその悲惨な状態から逃れようと努力する。しかし、幸福への道が、ただひとつしかないとするなら、人間には、今やそれ以外の多くの道が、同時に彼の前にひらかれることになった。情念は、人間が真理を求めることを妨げ、気づかしにうつつを抜き、邪欲に身を委ねるように彼を仕向けて悲惨な状態から救うかわりに、ますます人間を深みへとおとし込む。かつて有していた本性を失った人間にとって、情念は、彼が再び真理と幸福への道を歩む妨げとなるばかりか、第二の本性ともなる。

「邪欲はわれわれにとって本性的なものとなり、われわれの第二の本性をな

「パンセ」における「機械」について（望月）

すものとなった。かくしてわれわれのうちに二つの本性がある。一方は善き本性であり、他方は悪しきそれである。」(616-660)

邪欲に身をゆだねることによって、邪欲は人間の第二の本性となる。当然その逆のことも考えられよう。ここにおいて、人間にとって第二の本性ともいうべき習慣がその力を発揮するときが来る。本性の墮落により、真理、幸福への正しい方向を見失った心情を、よき習慣が再び、その正しい道へと向かわしめるのである。そして、パスカルにおいて、習慣は単なる機械的な反復動作を意味するばかりでなく、人間の本性のうちにひそむ、幸福を求め、真理を求める本能が無意識のうちに意志にはたらきかけることによって起る。能動的な性質をも有するもののようである。

(4)

今迄見て来たところにより、パスカルにおいては、心情といい、本能、感情、若しくは直観といい、意志、習慣といい、それが独立したものではなく、お互に関連し、作用し合っていることは明らかである。

人間、それは物質的なもの・肉体と、精神的なもの・靈魂からなる存在である。靈魂の精神的能力、つまり理性は、肉体的な部分と明らかに別の秩序に属するものである。ところで、人間はその靈魂のうちに、理性とは異なるものを共有している。これは肉体と理性とが全く別の秩序に属するのと同じ意味で、理性とは全く別の秩序に属している。それは理性の力では如何ともなしがたい真理の認識を本能的、直観的に認識するもので、それが即ち「心情」である。

Le cœur a ses raisons que la raison ne connaît point (423-277)

(必情は理性の知らないそれ自身の推理を持っている。)

Le cœur a son ordre, l'esprit a le sien qui est par principe et démonstration, le cœur en a un autre. (298-283)

(心情はそれ自身の秩序をもっている。精神もそれ自身の秩序をもっており、それは

原理と証明とによるのもである。心情は別のものを持っている。）

人間は心情によって、はじめて真理を認識することが出来る。しかし、心情が真理をいかにして認識し得るのか、人間にはそれを秩序立てて説明し証明することは出来まい。なぜなら、説明といい、証明といい、これらはひとしく人間の理性の力にたよらなければならないからである。いずれにせよ、この心情による認識が習慣の作用と相俟って、理性にはたらきかけることにより、理性はおのれの秩序にのっとって真理を納得するのである。

この人間の理性を超えた心情の秩序、それは失なわれた幸福を本能的に求める人間のかくれた本性を根底としており、障碍さへなければ、本質的に真理を認識し得る力を持つのである。

そして、人間が真の信仰を持つためには、本来、神が、心情を信仰へと傾けさせることによるのであるが、人間は習慣によっても信仰に至ることが出来る。これは習慣自体が経験を意味するばかりでなく、人間のうちにひそむ真理への願望の外にあらわれ出た行為とみなすことも出来るからである。

再び秩序の章の三つの断章にもどって、これら三つの断章に関するパスカルのプランを簡単に求めて見よう。

パスカルは、人間を救済し得る唯一の光明である信仰の真理を認めない人、無神論者、又は自由思想家と呼ばれている人々、「神を見出してもいず、これを求めようとせず暮している人々」(160-257)を信仰の道へひきもどそうと考えた。パスカルは彼等に、信仰は真理であり、大いなる光明であるから、ひとしく真理を愛する彼等も、神を求めるべきだと勧める。しかし、彼等は、おのれの理性を誇り、すべてを自己の理性によって認識しようとするので、宗教のうちに曖昧さと暗黒としか見る事が出来ない。パスカルは彼等に、そのように理性により神を求め、理性により信仰しようとする事は、この宗教にもとることではないが、しかし、真の信仰へ至る道ではないという。そして、それでは神を求めない方がましだという彼等に対して。

「パンセ」における「機械」について（望月）

C'est le cœur qui sent Dieu, et non la raison. Voilà ce que c'est que la foi, Dieu sensible au cœur, non à la raison. (424-278)

（神を感じるのは心情であって、理性ではない。信仰とはそういうものなのだ。理性ではなく、心情に感じられる神。）

神は理性により認識し得るものではなく、心情により直観するものだ、と答える。

ついでパスカルは、信仰をもたぬものが信仰への道へ歩む際の障碍となるものを除き、彼の心情が真理＝信仰を受け容れることが出来るようにしたいと考える。

Je voudrais donc porter l'homme à désirer d'en trouver, à être prêt et dégagé des passions, pour la suivre où il la trouvera, sachant combien sa connaissance s'est obscurcie par les passions; je voudrais bien qu'il hait en soi la concupiscence qui le détermine d'elle-meme, afin qu'elle ne l'aveuglât point pour faire son choix, et qu'elle ne l'arrêtât point quand il aura choisi. (119-423)

（それゆえわたしは、人間が真理を見出したいと思うよう仕向けてやりたい。彼が真理を見出すところまで、真理についていくような、心の備をし、情念から解放させてやりたい。というのも、わたしは人間の認識が、いかに情念のために晦まされているかを知っているからである。邪欲はおのずから人間を左右するものであるから、わたしは彼が自己のうちにおいてそれを憎むようになって欲しい。そうすれば、彼の選択に際して、邪欲が彼を盲目にしたり、彼が選んだ後に、邪欲が彼を妨たげたりはしないだろう。）

このような目的で書かれたのが、有名な、いわゆる le pari「賭」の断章(418-490)ではないだろうか。

パスカルは先づ、人間は有限の存在であるがゆえに、有限なものの存在と本質は知り得るが、無限なものに関しては、その存在は知ることは出来ても、その本質を知ることは出来ない。まして拡がりも限界も持たぬ神の存在と本質を（理性の力では）知ることは不可能だといい、相手の頼みとする理性の光に照らして、神の存在に関する賭を提案する。この賭によってパスカルが意図したこ

とには、様々な解釈がなされているが、要するにパスカルはここにおいて、「無限なる存在」Infini に対しては「殆んど無」Rien に等しい人間の存在。「無限の生命」Infini に比すれば「全く無」Rien に等しい人生、「永遠の幸福」にくらぶれば「ほとんど無」に等しい現世の幸福、等々、「無限」Infini の前での人間的なものの「無」Rien（むなしさ）を強調しようとしたのであるまいか。

そして人間は、おのれの存在のはかなさ、おのれの理性の空しさを悟るべきであり、また自我を捨て、情念の桎梏から逃れて、謙虚に、かつ習慣的に信じようとするべきである。そこではじめて、信仰への道は開けるだろう。

Il y a trois moyens de croire: la raison, la coutume, l'inspiration. La religion chrétienne qui seule a la raison n'admet point pour ses vrais enfants ceux qui croient sans inspiration. Ce n'est pas qu'elle exclue la raison et la coutume, au contraire; mais il faut ouvrir son esprit aux preuves, s'y confirmer par la coutume, mais s'offrir par les humiliations aux inspirations, qui seules peuvent faire le vrai et salutaire effet. (808-245)

（信じるには三つの手段がある。理性、習慣、靈感がそれである。理性を持つ唯一の宗教であるキリスト教は、靈感なしに信ずる人々をその真の子とは認めない。これはキリスト教が理性や習慣を排するからではなくて、その反対に、証拠に対してその精神を開き、習慣によって確信をかためなければならず、真の有効な結果をもたらす靈感に謙遜によって身を委ねなければならぬからである。）

はじめに述べたように、「機械」を含む「秩序」の章の三つの断章は、パスカルの「キリスト教弁証論」においては、宗教（キリスト教）が真理であることを人間に納得させるための準備の段階に属するものであった。パスカルにとって、信仰が真理であるということは、いわば第一原理に類するものであった。この第一原理を受け容れさせること。精神のうちにありながら、理性とは別の秩序に属する一種の自動作用、「心情の直観」によって習慣的に信仰の真理を

「パンセ」における「機械」について（望月）

納得させること。これがパスカルが「機械」という言葉であらわしたことだと思われるのである。

〔註〕

- (1) Charles Baudelaire: *Mon coeur mis à nu* XI, (19)
- (2) Louis Lafuma 編の *Pensées*, éditions du Luxembourg tome III (documents) p. 139.
- (3) Id. p. 140.
- (4) Cf. Id. *Lettre de M. de Brienne a M^{me} de Périer* (p. 125.) 及び *Lettre de M^{me} de Périer au Dr Vallant* (p.p. 147-148)
- (5) 10—11 月説 (Louis Lafuma) と 5 月頃という説 (Jean Mesnard) がある。
- (6) Strowski は、このような試みの下につくられた版を、次の二種類に分けることが出来るという
 - 1) パスカルのプランの枠からはみ出したものを別にまとめる。(ex. Faugère 版)
 - 2) それらもすべて適当に入れてしまう。(ex. Chevalier 版)
- (7) このような「パンセ」の歴史に関しては Raymond Francis: *Les Pensées de Pascal en France de 1842 à 1942* に詳しい。
- (8) cf. Louis Lafuma: *Recherches pascaliennes* p. 25.
- (9) cf. Louis Lafuma: *Pensées*, tome III p.p 33-34.
- (10) cf. Louis Lafuma: *Controverses pascaliennes* pp. 14-18.
- (11) cf. Id p. 137.
- (12) Lafuma は Filleau de la Chaise も Etienne Périer もそのプランをパスカルが 1658 年に行ったという講演の列席者からでなく、単に「第一写本」から得ただけであると考えている。
- (13) 以下、引用する「パンセ」の断章番号 (括弧の中に示されるもの) は、すべて、前者が Louis Lafuma: *Pensées*, éditions du Luxembourg tome I. の番号であり、後者は Léon Brunschvicg: *Pensées et opuscules* のそれである。
- (14) cf. 断章 (2-227) (3-244) など
- (15) cf. René Descartes: *Discours de la méthode* 5e partie
- (16) cf. *Œuvres de Descartes* (Charles Adam) tome XI pp. 200-202.
- (17) 特に M^{me} de Sévigné に、この用例が多く見られる。
- (18) cf. Léon Brunschvicg: *Pensées et opuscules* p. 448 Note 1
- (19) Jean Laporte: *Le cœur et la raison selon Pascal* (1950) pp. 88-89
Note 4. cf. Raymond Francis: op. cit p. 479.
- (20) Dieux: *Pascal mis au service de ceux qui cherchent* cf. Raymond

Francis: op. cit. p.p. 478-479. 尚, 「パンセ」の中に計算器に関する断章 (741-340) がある。

(21) Sorel: Connaissances des Livres (1671) p. 422.

(22) Dom Michel Jungo: Le vocabulaire de Pascal

(23) Jacques Chevalier: Pascal. p. 277.

参 考 書

(1) Louis Lafuma: Recherches pascaliennes (1949)

(2) " Controverses pascaliennes (1952)

(3) Dom Michel Jungo: Le vocabulaire de Pascal (1950)

(4) Jean Mesnard: Pascal, l'homme et l'œuvre (1951)

(5) " Pascal (1965)

(6) " Oeuvres complètes, tome 1 (1964)

(7) Jean Calvet: La littérature religieuse de François de Sales à Fenelon.
(1938)

(8) Alexandre Vinet: Etudes sur Blaise Pascal.

(9) Fortunat Strowski: Les Pensées de Pascal (1948)

(10) Jean Steinmann: Pascal (1954)

(11) Gilberte Ronnet: Pascal et l'homme moderne (1963)

(12) G. Delassault: La pensée janséniste en dehors de Pascal

(13) Jacques Chevalier: Pascal

(14) Raymond Francis: Les Pensées de Pascal en France de 1842 à 1942

(15) Ecrits sur Pascal

(16) Pascal Présent (1962)